

第三高等学校前身校とキリスト教

田 中 智 子

キリスト教との深いかわりをもった明治前期の官立学校といったとき、決まって口にされるのは札幌農学校の名であろう。そしてその深い関係ゆえに、札幌農学校は「特異な」官立学校だとされてきた。

たしかに個性的な官庁である開拓使の下でのお雇い外国人クラークの地位と裁量権の大きさは、他の官立学校に求めることのできないものであり、「特異な」と評するにふさわしい。また、クラークという有能な指導者自体には得られなかった稀なる個性である。しかし、札幌農学校のキリスト教との関係の持ち方すべてをその固有性に帰してしまふことはためらわれる。

札幌農学校の「特異さ」が強調される影には、官立学校とキリスト教の関係についてのもうひとつの大きなイメージ——主に一八九一年の内村鑑三不敬事件の評価を通じて培われた、対抗の図式——がある。そして、このキリスト教に対抗的な官立学校像は主に一高を含めた東京大学系の教育機関によって担われてきた。

だが、キリスト教への両極的対応が東京大学（系列の学校）と札幌農学校とに割りふられた結果、研究史上、二つの点への関心の薄さが生み出されたのではないか。

ひとつは歴史的経過である。例えば東京大学系列校においても当初は外国人教師によるバイブルクラスが開かれていた。ではその後、キリスト教に厳しいとされる官立学校へとなぜいかに変化

していったのだろうか。それについては解明されていない。もうひとつは両校以外の官立学校におけるキリスト教への対応である。明治前期の日本にはいわば八ヶ岳状の高等教育分布があり、東京大学とて頂点をなす特別な学校として存在していたわけではないことがいわれている。制度未確立期ゆえの学生の流動性（転学率）の高さや校長の人事異動の激しさもこれを裏付けよう。とすれば、「特異な」札幌農学校と「特別な」東京大学だけに視点を限定することなく、他の学校も含めた総体としての官立学校とキリスト教の関係史をもっと豊かに描いていくべきであろう。その際には、各学校固有の方針や内部事情もさることながら、学校を取り巻く地域性にも注目する必要がある。

以上のような問題関心に基づき、ひとつのケーススタディとして一八七〇年代半ばから一八八〇年代にかけての大阪における第三高等学校前身校とキリスト教との関係を明らかにする。ここでいう前身校とは、大阪外国語学校—大阪英語学校—大阪専門学校—大阪中学校—大学分校—第三高等学校と、度重なる組織改編を余儀なくされた当該期のそれを便宜的にまとめて指すものとする。

一八七〇年代に入ると大阪ではアメリカカンボードによる伝道活動が開始された。前身校の存在ゆえに全国から多くの若者が集まる大阪は、宣教師たちにとって魅力的であった。当初、前身校の外国人教師たちは思想的にも行動上もキリスト教の敵であると思なされていたが、一八七〇年代半ばとなると、彼らに代わって宣教活動の経歴をもつ外国人たちが雇用され始める。外国人は学校独自のリクルートによって雇用される場合も文部省の照会により雇用される場合もあったが、当該期には、宣教団と離れ「平信

徒」となって官立学校への就職を選択するという同様の傾向をもつようになっていた。

一八七〇年代半ばの大阪では、アメリカ帰りの沢山保羅を中心とした日本人キリスト者集団（阪神バンド）の活動も盛んになり、前身校教員のなかにもその活動の中心的担い手となる者があらわれた。その一人田村初太郎は前身校の生徒を対象とした日曜学校を開き、小泉敦は他の教会員とともに前身校の近くに新教会を設置した。彼らは、阪神バンドが設立したキリスト教主義の梅花女学校の教員も兼ねていた。

一八七〇年代後半から一八八〇年代にかけての前身校の校長たちは文部官僚であるが、かつてアメリカに留学し、キリスト教に入信ないしは深い関心を示したという共通体験を有しており、それが在阪キリスト教界への寛容な対応につながっていた。

一八八〇年には前身校生徒により浪花基督青年会が結成され、演説会を自発的に開催していった。聖職者の道を志す青年も登場し、宣教師たちは彼らが前身校とかけ持ちできる神学校の創設を企図した。宣教師たちにとって前身校はもはや嫌悪の対象ではなく、期待の青年集団となっていたのである。

一八八〇年暮れの大阪中学校への組織改編は、前身校にとってキリスト教との関係上の大きな転換点であった。まず医学科の廃止により生徒が転学して各地に散らばってしまい、外国人教員も解雇されるなど、キリスト教活動を担っていた人材が流出したのである。また文部省によって中学校には修身科が設置され、儒教を中心とする方向性が示されたこととなった。これに加え、文部省による学校管理が厳しくなった。一八八一年の大阪中学校事務章程を受けて、教員の「私塾」や「私立学校」における教育活動

にも、文部省への伺出による認可が必要となった。小泉は前身校を去り、田村は兼任していた梅花女学校校長を辞すことになる。

こうしたなかで大阪中学校時代には、前身校におけるキリスト教的な動きは影をひそめていき、宣教師たちの積極的接触もみられなくなっていく。

前身校におけるキリスト教的な動きが再び活性化するのは、大分分校に改編された一八八〇年代半ば以降のことである。再び外国人教員が雇用され、その影響もあって一八八〇年代末には第三高等中学校基督教青年同盟会も結成される。だがちょうどこの時期に前身校は京都に移転し、大阪のキリスト教界との関係も終わりを告げることとなった。

前身校の在阪時代は、大阪でのキリスト教界の発展期に相当していた。そのなかで一八八〇年前後をピークとして、両者の間に協調的な関係が生まれたのである。ただ、学校とキリスト教界とがはじめから別勢力として存在し、それを前提に相互交流がなされるという関係のもち方であったこと、また前身校特有の度重なる改編、特に中学校へのそれによって、人材が流出し文部省による管理体制も強化されたことで、札幌農学校のごとく学校自体がキリスト教的精神に覆われ、地域の伝道拠点ともなるということはなかった。

以上がこの研究の概要であるが、最初に述べたように、明治前期の官立学校とキリスト教との関係史の全体像を構築するためには、他の事例研究を積み重ねていくことが今後の課題となる。